

心動くまで

藤澤文恵

「検査結果を一緒に聞けるご家族か付き添いの方はいませんか？」
看護師さんの目が困っている。遠慮がちにゆつくりとそう言われた時に、まさかガン宣告では、と肩が上がった。

36歳で初めて受けた乳がん検診だった。シングルマザーの私は平日は事務職、土日はサービス業と仕事をかけもちして常々時間に追われていた。家事育児優先で自分の健康など二の次どころか眼中になかった。ひとり親なら誰でも珍しい状況ではないのでは、と思う。アルバイトから正社員になれた事から健康診断を受ける機会を得られたので、どうせ受けるなら乳がん検診の項目を追加した。なにも自覚症状はなく、婦人科は検査をしていたけれど乳がん検診はしたことがなかったから、という軽い気持ちからの選択だった。

サイズは7ミリ、ステージは1、その数字が何を意味するのかも知らない。とにかくお医者さんから初めて聞く言葉を、聞き取らねばと必死だった。「とっても冷静にお話が聞けていますね。いいですね」

お医者さんは少し表情を緩めてそう言った。

「いえ、感情を入れられないようにしています。シングルマザーなのでなんとかしないといけないんです」

そう言うとお医者さんはハッとまた表情を切り替えて、説明に戻った。

口に出すと涙も溢れそうになって、どうにか堪えた。子供達には言うか言わないか。親族が近くに住んでいるから生活はなんとかなるだろう。でも子供が健全に育つにはそれだけでは足りないはずだ。私さえ頑張れば大丈夫だと思っていたのに、頑張れないのでは。高校1年生と中学1年生になったばかりの娘達のことを考えると、息が苦しくなる。

どうにか診察室での時間を耐えて出てくると、ある看護師さんに呼び止められた。診察室ではない個室に言われるがまま入り、今後の流れを説明された。

「一番心配なことは何ですか？」
考えるまでもない。

「私、シングルマザーなので、子供達の事を考えると」

涙にのまれてその先は言葉にならなかつた。看護師さんは汗までかいて泣く私をずっと待ってくれた。少し落ち着いてから、家族には正直に言ったほうが予後に元氣な人が多いことを教えてくれた。他にも色々、パンフレットなどもいただいたのに、今も覚えているのはそれしかない。泣かせてくれたのだと思う。それから1ヶ月程で手術、その後は放射線治療をした。女性ホルモンに反応

するタイプのガンだったのでリニュープリンという皮下注射と、タモキシフェンという女性ホルモンを止める薬を5年飲むことになった。お医者さんは薬についても手術についても、丁寧に膝を私に向けて説明をしてくれたし、どんな質問にも答えてくれた。

「仕事は絶対に辞めないほうがいい。どんなに迷惑をかけていると思っても、気がつかないふりをして」

働き方について相談をすると、前のめりになってアドバイスをくれた。治療にも家庭事情にも理解ある雇用主に恵まれ、正社員の事務職だけを続けてアルバイトは一切辞めた。これは私にとっては大きな変化で、かなり勇気のことであった。

「お金は元気になってから稼げばいい」

ママ友の言葉で焦りをグツと抑えることができた。時間に余裕ができたことで、食事もコンビニのおにぎりを甘い炭酸ジュースで流し込むような事は、一切やめられた。病気が発覚するまでは、子供達が成人するまで同じような生活を続けるつもりでいた。

少し落ち着いてから周りの人に、検診に行ったほうがいいよ、と自分の経験を踏まえて話した。まず私が乳がんであることに戸惑い、反応に困っているように感じた。無駄に不安感や恐怖心だけをぶつけてしまっているのでは、と話す事をやめてしまった。

みんな頭では分かっている。健康のために検診は定期的に受けた方がいい。それでも聞かえてくるのは「行ったほうがいいよね」「行かないやね」「行くことは思ってるんだけど」実際、「検診に行ったよ」と後日教えてくれたのは数人だった。かつての自分と同じように、「まだ若いから大丈夫」「元氣だし時間がない」「健康に気をつけているから」「もしもなにかがあったら」「行かないどんな理由も根拠のない思い込みでしかない。生きていく限り誰にでも病気になる可能性がある。しかし正論で人は動かない。」

あれから毎日飲み続けた薬が、今回の処方でも最後となった。

乳がんのしこりが1センチになるまでに10年〜15年ほどかかり、1センチから2センチになるには1年半ほどだという。あの時発見できたからこそ、大学生と高校生になった娘達と共に、笑って今を生きていられる。1人でも1回でもいいから検診に行つてほしい。

検診で身体を救われ、たくさんの言葉がこれまでを支えてくれた。

心に届くように、言いたい事を発するのではなく、伝えたい言葉を形にし続けていきたい。